新花摘

上号

從四月八日

其角堂永機編
小野桃齊校

新花摘

乾坤

癸未晩秋

白雨社藏版

新花摘

天保五年六月廿三日の夕方母子
[illegible]悲しく歎くいやましさ
[illegible]の[illegible]晋子の孝子
[illegible]の花摘を做て形と
[illegible]
起し[illegible]の羈旅[illegible]
夏々の仙境[illegible]花を俳ヲ雪を個
艸の[illegible]の草[illegible]の[illegible]

孫子五十年の星霜をへ初のあ
こがれ年月光の忘のたよりあれも
その日その日見聞文言の句我つみて
一夏百句の孫子法の隨時經と早て
海内の導師に路る新跡をわたる事
あらをも彼日記なるもし

一燈礼　永機述

五月十四日　陰暦四月八日

長建寺

灌佛や十二り時の雨ひとつ　拙

十五日　深川淨心寺通り法華寺新地翼塚
いつかつすかつかつの情死とらけまつる
いつかるかつや彩よ笑てつて

蟲蟻のこゝろこゝろの迷ひの夢
夢の別れ隔てちりぬる花の跡　西京　芳舎
神の果てそれを聖の果ぶる

清らのもて来たる花鏡　清しま　松翠
声　生よくてき鶯　トチキ　石花

西の法箱よ於ふ

掃除すまの朽葉ちり　西京　百可

十六日　出羽　お葉よ　元兆画讃の一軸を
つくもとう　その句　又一この稽の
面とハ音ちの時のの文行のを

四世　一この稽の落ます　於
春ノ平　雲よ　郭公　静和

葉しの所ゆ夕涼の八つさい　お栽
夕雲ハ　もとし　立さ汗抑　於春
行るよ　こ　手種　一鉢酒　春宜

十七日　こ春を　図むかる　居廊して
切る刎る　手の　ハ　沖翰　於
春行し　その　春さ　尾八　ちあ

こ　春の　ち　於ふ

ひ寝ん　春の　ハ秋の　西京　桜春

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]時雨
[illegible]て[illegible]の[illegible]　杜若　西京　稲麻　春江

向島

[illegible]て[illegible]の[illegible]は[illegible]　尾州　羊山
[illegible]といふ[illegible]二[illegible]　笠中　弧竜

十八日　静亭三世黄花菴を授[illegible]

[illegible]世[illegible]の[illegible]の節　拾
[illegible]　柘高

[illegible]なし　時雨　華谷
[illegible]の[illegible]の[illegible]の上　孝高
[illegible]まし[illegible]の[illegible]の[illegible]　扶桑　芦水
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　梅后

十九日　布袋の讃

川[illegible]の[illegible]の[illegible]一包[illegible]　拾
[illegible]の上野[illegible]の[illegible]の声　春湖
[illegible]の[illegible]　紫香

夜八強くやみちかく河鹿の
聲の風ふく程の郭　　桂月
生て居る画猫を乗せす蛍うり　　蕪一
もの思ふ川もなしなの机　　布川
かるの果ち老待春寒し　　魚心（エチユ）

九日　善哉庵中
代てゆしさ心の牡丹小　　桂
咲ちるひく桂子柳小　　雪蕉（横又カ）

九一日　芳蕾無とふ蕾を抱て
待るの外なひとつ咲ぬ　　桂
羽織の色よりの赤のちる
七合さん　暑さ　　蒐好

九二日　義なる家　新の子孫なる
鳴き蛙無き面影の俳諧小　　桂
小金井陸奥
もやもや水一ちの河　　松瓦

ひらひらと移舟のうつる面影　イツ　蓮水
紅葉てはやもとの水口よ　まつ雄

十三日　亡師宗蓮居士追福
くさ葉散そめ三十七蓮の花　桂

十四日　翁百九十回忌　仙台甫山より向を乞て
松島や眺めんとせし人の夏　、
郭公鯛を陸する夢しかな　素石
ちと寒き日の牡丹の咲て　恕宇

清涼寺　釋迦の手ふ仏の五十九打　金羅

十五日　遊紅葉館　一室に利休の像を
為置ける大徳寺の和尚　嗚呼
前の川上不白保本せしを
此一軒に生涯を破れて
笑ふて
松ふる住よ月の雨　桃　桂
一ふし又我住くらん道歌をひろふる
なくとまらん　山家集
床掛伯
仏像の八畳屋を吹寒霞　楊州　松

[illegible]　梅雨　梅雨

[illegible]　梅雨

廿六日　岡部

みしらぬ[illegible]　梅雨　梅雨

蘭を[illegible]　アハシ　園策

第[illegible]　園策

草庵

面の[illegible]　岩代　業秀

[illegible]　歌　蓮阿

廿七日　郡外

桑[illegible]　蓮阿

廿八日　如来肩間[illegible]白毫[illegible]阿雪

夏の[illegible]士佛[illegible]

[illegible]の葉[illegible]　ユキユ　右儀

[illegible]面原

此すみ[illegible]　前バシ　正義

時雨ても日和見しの菊花　シナノ　楽二

如月さし日の風に吹飛ぶ書の上　スカ川　壮山

廿九日

杜宇待つや寝覚の蜀帝　拾

岩舟山

御佛は石の上なる夕涼み　高サキ　恭海

我問ふは青田の中に[illegible]起心　ナゴヤ　鏡女

松影と日南の中[illegible]　松鳩

三十日

三位[illegible]よりよまれ

[illegible]

拝寫一休自画狂讃

律師は[illegible]水刹をして月見[illegible]

[illegible]寫して

水刹の跡を律師の涼みかな　拾

三十一日

鹿の毛の羅書きて手[illegible]　、

[illegible] 西京 黄仁
[illegible] 、 稲雄
[illegible] 、 仙峯
[illegible] 遠州 十湖
[illegible] 三河 [illegible]村
[illegible] 上州セン [illegible]

六月一日 八百善 茶亭 正午

席上忘蕙

客

松平市正
[illegible]野[illegible]川
音[illegible]
寺[illegible]梅章
小川杉民

床 [illegible]
遠[illegible] [illegible]

[illegible] 大[illegible]作物
[illegible] 南[illegible]の[illegible]
[illegible] [illegible]
[illegible] 雅楽[illegible]

[illegible] 義政
釜 [illegible]
[illegible] 古[illegible]
羽[illegible] 山[illegible]

後入

席 義文紹間 宗雪 高第 花 左山蓮

茶入 仁清 第一尾伊 茶銘 修学寺 霜降 殊篠家不昧書

棗 枝 東山の秋とも間 紹宗 赤心 蓋の春陳 内茶 初昔 上林後

一年一度 第ふ昧

関の雪とも 仕 時 雪 花

部云義改とのきもつ 拙

二日

巫山の雪をうつす馬塊の高を
赤しとも黒の世の中しらず

夕風や 杉葉吹ちる 仏の上 拙

入梅の思ひ出もまた有の秋何 竜吟

竹ハ実 古葉の西 月 工夫 護水

三日 於亀戸社頭千句披口

宇武と負徳と 拙

通ふ川 四世 大矣 殺 静五

老の春に斗 無病 太年

一庵うしの棹さし出し
歯の浮まの風の音源　　京雲
梅年

卯日

[illegible]　　桂
ひとつ葉や[illegible]　　藍庭（ミノ）
[illegible]舟の[illegible]戸沖鶴　　戸木　桔梗
[illegible]の風の更色こそし織月　　アキタ　千之
別れ[illegible]町[illegible]出の夕葉河　　羽ヶ　二葉

五日　東叡山院

[illegible]　　桂
[illegible]　　小久九　彩儿
鮭の子乃そ[illegible]川[illegible]　　ヨチユ　旭扇

六日雨　江の島社

[illegible]　　桂
竹屋の浦
[illegible]九輪[illegible]　　紫雲

七日

海辺の苫の上かな浦の月　桂

夏の雨の明るくうつる　梅孝

牡丹奉樂

明神の御足ゆかしすまこ岩　桂

七八の面白きゆまみかとりつる
御上の花ゆかしき時成面白

八日雨　榎嶋

蕉邑の撥くく根雲拾ふ芋　丶

寂海石

那あらくく昔の如とし四五集　孝

児の剛

龍地の松のとく雲ちと蒙恵へ　笠仙

ちくまく色ら那くく
ちくまくとと——の人の里のんとくなかとい入江の
なくくとこくくよくくちの下ムエドとかれ表方

夏きく昔——のあり剛の色　孝

俗風くまとの——ある扇　桂

九日　晴

図らずも入て被佛身舎利を拜奉る
金色の光明所々を拂ふ
一生に願望之々義を詠て切の
晉る中に為撰す

陸奥の風吟じ出す　足疾鬼　樵

七月夜望　酒間月興

夏山の新を入る日暮れかな　紫長

赤ゝ落るの音一声　梅屋

渋い表の結構の美なる　笠仙

川遠くして陸を倒る　武職

うゝ減河の情のひゝ作也　重

歩を運ぶ所の酒　長

丁度て作る赤の間る所の　樵

夜永のもの荒の樞者　仙

古表八章

宝永元年甲申七月七日曉の夢て所也
榎島の坊又沙人酒　出る中て歌とする

笑ふるを怨大逆流天地をふるはし雷電
霹靂くの雲動家隣際を沒滿尺周章シテ
四五つき中方を失ふ赤の方青雲ヲ
ふるひ一丈余隆き出る事四尾八流の
もちる有三光しらはりて又たりは上ま
隆きこゝかゝ上ちるその様怪しく恐敷まし
首尾現ぬ為是刹龍神佛出現の
如地ゆりて怒ふ物ありと笑ふ刹帝ヲ

全身背中ヨリ隆き三重四重ふまき河ケ
右の肩ふて頭きふ形ふれさも多ひし時
玉瞳の光赤紙もして口ふ左の耳のうふく
つも玉ふ人音ヲ出して河神佛像の
三を重んず神八和歌の神祇ふて心ふ
理ふ内ふ擁護と無況の忍神凡夫ノ
口心ふ入ふ佛八三世不可思議の
四神なふ十と十の佛智を好ふ

おもしい操なる心得ある眠よりさる事術の
筆跡を作りかへし我も其所をさとて
んかり儒を似してすきまなり支を行ふ至
まいしと告げをなさしそて筆は作りめ机上
亩の窓でむかつくに名山の方をを礼拝し奉り
すなわち文松を起して思ひし東叡山寺の
志信し奈才民へ気請し急てまつる
心願を叶てそれなり　元三大師の御選

執筆し唯気塙し何となく筆の心をかき
まへ神なる籤箋をこうろひ得りし久

第六十九吉

異夢生英傑　前栄事可絶
芳菲春日暖　依舊發殘枝

入松が卦まえて右し鬮を執し是をも受
奉らぬ何しさ内なる霊符をも入切とりよしき
わざとなき得ても脱して御鬮の内と霊奇のかくし

[illegible]円満せしるを御詠

[illegible]の茶屋より敷れての蓮下　晋子

蓮切りかもすきれい音を聞、

入松を[illegible]の家前[illegible]初めい[illegible]

天を[illegible]水の[illegible]蓮の[illegible]入松

五元集に蓮の二句有て民霊[illegible]
東湖の糸[illegible]
[illegible]

十日　[illegible]廣　裏の秋　春雨

[illegible]

十一日　散歩

[illegible]

苗の色〳〵上野を花の雲の時雨
ふるまゝに結ぶ移りの一声を　東京　晩色　拾

十二日　雨

はるゝ〳〵そゝ〳〵ものの霧深山
若竹よりうゝ〳〵庵の茶の煙り　カヽ　翠宮　拾

別戸多市

祖母懐の移りの色まつ皐月雨
けぬゝ〳〵ちゝ〳〵日和〳〵ものの鶯　尾ハリ　杜叢　水戸　阜志

十三日　拾ちゝ〳〵床の扇〳〵シコテクヤラウ病し
移りの噂り鮎を碓も紅葉なる　拾
坊拾よて
序遠き思ひ田毎の蛙哉　ギフ大樓　加竹
真角堂宗日
蒲のちゝ〳〵〳〵の節　梅軍
郭公八声の所よ串に　拾一
〳〵ちゝの〳〵〳〵ひる雲　京雲

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　桜町
[illegible]しき松の[illegible]　真冠
山陰の[illegible]影の[illegible]火串[illegible]　松切
[illegible]高砂公の[illegible]に陪て

狂言　寢音曲　左一
[illegible]の声　東京

[illegible]　挿
花貞尼也　補　静丸書し

[illegible]　[illegible]　栗
[illegible]居[illegible]昔す[illegible]花のさく　トヨハシ　蓬宇
[illegible]生涯の[illegible]な、　平仙
[illegible]起さる[illegible]、　没古
十五日　一[illegible]のを明る
大和路や[illegible]よ[illegible]麻　挿
[illegible]て吉野山　尋丸
[illegible]　古年

十六日　はきの――ちる紅葉を
波の叩く磨き出す岩の面　於
涼しさや波の死　上ヶ　江波

閑吟

客ありてそよぎ出でる柳　子住　素扑
蟬の声を礫に　時雨、　保年

十七日　十七ノ解ニ　酒肆魚市化念成佛一とう
鯛引する門の百姓の家仏　於

十八日

夏篭の笛とるいや啼鳥　於
涼しさ新しきあるよりの戸　ウゴ　美山
破れたるものなり　里の月　エチコ　晴雨
新しき紙張りの西、　中壽

仏の日和を亀ずまを　苴　ナユヤ　徂康
酸漿を雅淡の彩
ものいうて都を会す鳴れば、　霧雨

十九日

朝の月の心他ふかし　素性　拾

十日

竹切り竹の中なるみの十日庵　〃

名月

笠すくるる適す面の暑ひ　シナノ　一艸

待宵や東山、桐里

朱義の入日や河牡丹、乙峰

十一日

増山の井の清水流れとめて夏の夜の月を見るかな　後水尾院御製

撫子や毒なき宿のかりの中　拾

十二日　雨夜獨坐

足駄ふ拍て涼しき水鶏　〃

十三日　慈母五十年忌

永き日を嫁き日とし昔を　〃

むかしきく花の香ぞ　呂雲

ぬるさの香ぞ　祝井戸　杜多　梅年

法の声めでたきこゝの国おく　松嶋
けふ来り　ま[illegible]を手向ん　永賀
[illegible]の[illegible]の仏生まれ給　蓮の露　永國

九月日　少越後杖の蒐好と三家をつとる

一枝酒雪をつゝみ日しなり　性
[illegible]とせあらん[illegible]
みゝ[illegible]の[illegible]ゝ子拾出　蒐好
玉塚のこゑ[illegible]ると鬼薊　丶

有数ものゝ[illegible]
秋夏の[illegible]相寸　尋色
[illegible]なり　牡丹　大坂　古国
[illegible]　エチゴ　青暁
[illegible]の大[illegible]　ミヤ　布精

九五日
九六日
九七日　六祖ノ讃

夏籠の白かさ別るる方思ひ
紅葉する雨とかの人なの庵　於子安　梧桐

九月八日　部外道士八坂路出し
起くるなる事なれり　於六坂　栖雲
八月廿九日の雲を見て
遠州灘
山を色とし船の深みる　静五
草々雨と成る月夜の秋　於イセ　梨園

九月九日　遊市村屋
散歩にて著せる暑い　於三井　梅章
滝の音の汗ふる勅の暑ふ
陽炎の舞ふ蝉の解を夕涼
やまを不動のあるを知るとしら勅る役を
ものもせず

三十日　止波浦にて
一るの藻屑を吸きて
於ものけかる甚の家　於竹窓

七月一日

西山ゆかしくする夜の郭　接

夏の日も暮るところ〻し箱根山　正二位　蕙亭

二日　西東京の江戸にて題

音信の蘭のよ姿に行とる賣　接

三日　西　瓦坐

てるもしも雲空一所

月の光こそ八坐の様の

反姿さ〻し　〻

ひと〻ゝ行き涼しのおもひ　大坂　流美

こ通世間の景色にて

水鱧を河のつとめ多すみ、　晩芦

京清水の通を八坂迄とて

住保姫の結ひ髪の形者、　家長

明るふる笠の著物　内梅方、　徐水

日よりもとて河のもとに面を洗ひ、　竹丈

夏風の打とるかつを　杜若、　似水

拙き俳句を聞とて

葉形よ咲てみるゝし柿の花　青柿

柏郎よ行むと入口初　裕　徐來

二の宮を待よ春の野　路　五春

てもゝ山ゝこゝちする国の酒　文國

窓を拭さかの窓しかゝまれ　九華

初雪日ゝとてかの咲ら井　不角

陰のみあるおくなる庭の寶ゝ　柘子

慣とて法らの一庵の欠碗　小窓

青柿四時茶碗　蕾の実　小叟

紙つゝ道八狗ゝ子の義の中　八千代社中　茶松

山里ゝ色ゝ子郎ゝ砧ゝ子　鶴光

秋風の打寄ゝ子ゝ小笹原　柳吉

遠ゝゝ子ゝ於　柳吉　圓丸

ゝ雨ゝ子稲ゝ入ゝ咲　貞徳

俄宝晋翁帰京

寒と成しさるを　大坂　昂居
つ送るこの居る扇のうゆる迄、　梅村
彼ひ所さとて多く葉　八十三翁　井資

　　播州路を遠て杖を曳迄
三めくりの春の花の一ッ哉　兵庫　似蘭
陽炎の昏るる宵の、　李鯱

　　一部を半ばて
ふるさとはよりの雪、　雪子
　　ちまた氏の坂堂ち

寄寝して中の外に、　巨鯱
昼の沸なりする　源翠（ハリマ）
ひっと鳴る青葉の色塚の雫　笠雅（ヒメシ）
弱金　宇志
小春　花八重　竹苗（ミヲ）
　　小内を赤木に八月五日
　　芙泉の翁と鳴る
山間の佳つの義り、　藍庵
移移八叶川上より、　蓋及

この里に已百といふ翁あり菊を植てこの田植ゝ　已百
菊

笠にかゝるめん園のたゝりか

の

ひとりせん藜の節を成日迄、

菊後已百郷に十郎仙を祀りて音を
もとゝ点じ給ふ　みぎ章者
ひとゝ迄ゝ酒に藜のひゝもの　甚角
け一納て静に所言乳茶　已百の名花つゝみ給ふ

名をもちて清ゝ時分　尾ノ　静所
水芳ゝ小里ゝ　永賀　永賀
春といふ日ゝ野ゝ芹菁、　清江
きのふ杉尾ゝ梅青ゝて
改名をたゝふる紫ゝ八雲抄の
まれに雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ
結んでゝ

拾穂軒李吟悉義　西

春花の散ゝ老ゝ
如酔南老人一所発

[illegible] 久居 夕秋
[illegible] 三河国 素溪
[illegible] 旭亭
[illegible] 乙彦
[illegible]

北山芭蕉庵の居まへ
[illegible] 西京 蘭出

卯日 雨 蓮亭

晩の時を迎ふ音や周義叔 於
[illegible]
笠投げ入れの[illegible] 文政六年九月 古外
[illegible]
[illegible] 尾ノ 立意

五日
住みすて宿のめ[illegible] 土間か
[illegible] 下毛 於
[illegible] 夜山

六日　恋を庶もりて
　　[illegible]　　捨
七日
　　[illegible]　　一首切　　丶
　　学文路[illegible]
　　[illegible]　　唱の歌　　源美
　　源氏の[illegible]　　亀田川　　桃高
八日　雨

如て[illegible]の[illegible]の[illegible]　　捨
水海[illegible]　　恋海
[illegible]　　尾ノ羊山
九日　雨
十日　[illegible]感
　　殊[illegible]の緒と同[illegible]林[illegible]　　捨
十一日
　　抱[illegible]　　巫山の[illegible]　　丶

おりはゝかゝひとゝぬも杖の蚫　トチキ 清魚

昨らよのもとに

十二日

とくしとけゆん清水の寂栞　指並

梅翁が一子氏乃　去年山雀の子を

おくりて日毎の句をこひ

四十年にしくことも　なのむし名の木ちる　捨

病中の好ミに苦しくてゐたりしく　又かゝる入梅のむ梅翁

廿句を記し置して八月十八日寂す　子ハ另人とハんし

絵(?)を甚ゝ披露氷と成らむことをよ

十三日

らしゝ

寛待や揚屋の門の夕掃除　、

十四日　かゝひる浦は金沢手形

舟興

すゝしさや都すゝむ水の底

涼しさや泳をつた一里の遠回り　崔志　、

金龍精舎

一夜篭やまた世の中清めく　蝸の家　眞岳

十五日　上行寺

猫のあてがるゝ背に墓乃露　捨

十六日　天台の法山、心經年房といふ所にて
そ一卷よこし給る事ありがたく
意なるしるしにそのあたのをうし
かりにれば世の迷情の数てやれと

一ぬきうつはなるこし鮨の磨　丶

東海道

白砂つゝ敷さへぬまぬしの山　アシカ、義精
竹の子つゝ持ぬふせるる孤し　丶

十七日　室井家二世晋流る妻のか祥忌
数〳〵もてなるとて

一字ゝたちぬるのもん數句經　雅
雅世
わけて待蓮を旅のちぎり　室井　うつ女
也善
魂結て注てこるあの気形さあ　母
みさをといふ遊るかつらさん　七才　青ちゝ
耳ゝ鳴る吳見ゝとぬ秋の声　青ちゝ
もちゝとひる並ゝ瓜の馬　松女

何ゝとなくなきたまへる魂祭　二世　晋路

て、貴子命の末孫也、狩国主

十八日　市の行居のいとせきたまへ

上陸る赤い字のすく暑うて　拾

玉物を新蹊の名きを永へきを炷て

みてきやかな百人　平柳の水　巷雨

十九日

西の蓮羅ゆすり白ち永　拾

七日　無蓮善女と手向て　宝井のうまし

夏碧の雪ゆきなるなり女子学

百の雪ゆきゆきゆき中也ゆゆ　三藤

川生ゆゆ一見もてゆゆ百の人　スカ川　壮山

百合赤し　聖道の高のあるを　紀タ　嗟ゆ

柳ゆゆ夕陽ゆゆしすゝ川　月静

行ゆゆ八彩ゆ光ゆゆ川の柳　シナノ　省我

雀ゆゆゆ雀ゆゆ　孫ゆゆ夜竈　其弧

六一日　遊天現禅寺謁古道和尚

すゞしさや茶の泡の上八刻　捨

茶も酒も涼しさにせりかけり　素玉

水おちて隣もすゞし五の虫　亭雲

六二日　長安ハ古来名利の地とそ我翁も

阿るまじの羽をきて過ぬてはなし　捨

梅津道に遊

夕顔や柳と堤とすかりて　梨春

千さらし炮の上し我も用ひし　静和

口切や月切の竹ふらし　横ハマ　楊交

たゝら又葛にも毎ゝ舟は　フシコ　巌也

六三日　待乳山に登りて夕暮て

出家き山花売のかまへ　捨

涼しく流し水瀬さゝも涼しさ　国府　袖丸

我まで行て門は文月夏の月　下サ　其風

扇くれし人の旅しゝ　ミヤサキ　為深

七月十五日陣より寝ぶ猶ほ残りし
夜ひらけぬ秋の一重かぶ物　正義
草枕ゝ重ねて蘿の吸ひ水（重ハシ）　あ水
こゝ通ひ宮島の杖きゝあて
廿四日　三三月かまと角ゐ　厂峰
序遠き古へ河きる吸ひ　拾
十五日　酷暑

十六日　石山寺より三井寺に到立ての昇池より
夕立のゝ八限ひきて涼しく　梅甫
権の床も撫ぶ居代月の宿　於
石山の夜と成ぶ行くる　大ツ　昇池
名のみ言ひて涼しき　もモリ　猶年
一ときの別も吸ひ能の味　ノシロ　畏候
宮殿瓦や浅ひの色乃秋色き　略ノス　吉友

九七日　かくてみちを笑もすぎと声なし

眼よ思のまゝにまぎれる情ゆゑ　捷

九八日　金地院内

生ば（サバ）吟より蟬の鳴る暑さ　丶

九九日　よし原

地獄やんなる入歌のむし　丶

涼しけよやまぶしと情の色　高原（コウゲンヒ）

秋の夕の明るみの上　晋水（おハシ）

原憲之徒蓋この如是

日よりあつて行すゝ月やの一番の衣　捷

三十日　病床の水仙よ識の付き色ハとて

義を守る世に仕えて朱土の虎　古雪岱

皆を枕元の発るまでの度
もすとし雪ぶちて高山の人

三十一日　智艶童女の茶毗送りて

綾なる紙の高つ花の果　捷

惜むより仏の義の頑ゆ　こつる

八朔やつとかすりの柳吹（イカホ）　栗園

賓花の咲こそ涼しなく　吻叟

苗くさを上社の菊見ぶ（ユチユ）　一笑

竹茂れもてくらの山（ヒンユ）　暁雨

茶戸寒し一夏九旬の塔り鶏（カヌマ）　芦葉

新花摘上の里碑

其角堂永機編
小野桃齊校

新花擿

乾坤

癸未晩秋

白雨社藏版